

大日本史 最終回

太平洋戦争 開戦と終戦のドラマ

何がこの国を出口なき開戦に向かわせたのか。そして終戦時、昭和天皇の胸に去来したものは――



山内昌之
明治大学特任教授・東京大学名誉教授



佐藤 優
作家

山内 今回はいよいよ太平洋戦争を論じたいと思います。なぜ日本が勝算のきわめて乏しい対米戦争に突入していったのか。そもそも対中政策が行き詰まる中でどこに活路を求めるかという模索の中で、一貫して陸軍が警戒していた仮想敵国はソ連です。陸軍は日露戦争以来、満州でソ連軍と正面から決戦することを想定していたのですが、一九四二年四月の日ソ中立条約で北進を断念して、資源確保のために南方作戦へ向かう。アメリカとの戦い、特に太平洋の島々で米陸軍や海兵隊と戦うことなどは歴代の陸軍首脳が予想もしていない事態でした。なぜこの誤算にブレーキがかからなかったのかを考え

るとき、私は陸軍と昭和天皇の関係が非常に重要なポイントだと考えます。それを象徴的にあらわしているのが、二・二六事件の時の侍従武官長だった本庄繁の振る舞いです。この事件中、昭和天皇は本庄を四十一回も呼び出し、「自らが最も信頼する重臣を殺傷することは真綿にて我が首を絞めるに等しい行為である」と述べ、自ら「暴徒鎮圧」にあたる意志をも示しています。そうした天皇の危機感、怒りに直面しながら、本庄は陸軍首脳から「首謀者一同は自決し罪を謝し下士以下は原隊に復させる故、自決に際して勅使を賜りたい」という旨の申し出があったと言

上して、天皇から激しく叱責されているのです。

しかも、この本庄は満州事変の時の関東軍司令官で、奉勅命令によって動くべき軍隊を私に動かし、朝鮮軍の越境を依頼する結果になったのです。関東軍の条約によって定められた、満鉄沿線地帯外への出動や朝鮮軍との協同作戦などの行動は、陸軍軍人として陸軍刑法に反するうえ、中央の作戦大権つまり統制も無視している。それにもかかわらず、本庄は満州事変のあと関東軍司令官として凱旋し、石原莞爾作戦主任参謀と一緒に拝謁した。つまり、天皇の意思を踏みにじった軍人が、侍従武官長を務めていたことになる。これが昭和陸軍の特性をいちばんよく物語っている。

佐藤 二・二六事件をインテリジェンスの立場から見た面白い資料があります。元特高憲兵・小坂慶助の書いた『特高 二・二六事件秘史』は、事件を企てた将校・兵士たちの振る舞いや表情が活写されていて、その計画がいかに穴だらけで、弛緩したものだっかがよくわかります。あるいは斎藤実内大臣の屍体には全く血の出ない銃痕、すなわち絶命後に撃ち込まれた銃弾が七十二発もあったといった残酷さもきちんと記されている。

山内 二・二六事件を首謀した将校たちは、麻布のフランス料理店、龍土軒の二階などで密議を交わしていた

んです。そこにも憲兵が張り付いていたのです。

佐藤 そうなんです。小坂も、青年将校らによるクーデターが起きることは事前にわかっていた、と書いています。あとは、いつどういうかたちで起きるか、それを掴む前に事件が起きてしまったと悔やんでいるんですね。また彼自身、陸軍の一曹長にもかかわらず、官邸の秘書官や財界の要人とも連絡をとっている。つまり、非常に高いレベルで仕事をしていた。

ここで問題は、憲兵たちの得た高度な情報を、事件の予防など、国家のために有効に使うシステムが機能していなかったことです。だから「情報のための情報」、つまり情報収集が自己目的となってしまう。これは、今の日本の組織にも通じる病理だと思えます。

「よもの海」と軍部の沈黙

山内 二・二六事件でも露呈した陸軍の天皇軽視は、開戦の決定時にも顕著にみられます。一九四一年九月六日の御前会議、これは英米などに対する開戦方針を定めた「帝国国策遂行要領」が決定された会議でした。このとき、昭和天皇は有名な明治天皇の御製「よもの海みなはらから（同胞）と思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」

を読み上げ、避戦への思いを明らかにします。

まず、ここで着目したいのは、昭和天皇の歴史的な思考法です。この決定の歴史的な重みを明治天皇の思いと重ねて表現している。後の話になりますが、昭和天皇はポツダム宣言受諾の際にも、国家主権が連合国によって大変な干渉を受けるがそれを耐え忍ばなければならぬとして、三国干渉のときの明治天皇を引き合いに出します。ここにも昭和天皇の、歴史的事実を長いスパンで捉え、アナロジーとして理解する思考がみとれます。

さて、問題は天皇がこの歌を詠んだタイミングです。この「帝國国策遂行要領」で最大の論点となったのは、第一項で、「帝國は自存自衛を全うする為対米（英蘭）戦争を辞せざる決意の下に（略）戦争準備を完結す」とあり、第二項で「帝國は右に並行して米英に対し外交の手段を尽して帝國の要求貫徹に努む」とされていたことでした。天皇はこれではおかしい、外交が主で戦争は従とすべきだと指摘しますが、この正論が通じない。「昭和天皇実録」によると、原嘉道枢密院議長が天皇の思いを代弁して、「本案文を一瞥通覧すると、戦争が主で外交が従であるかの如く見えるが、今日ほどどこまでも外交的打開に勉め、外交に努力して万已むを得ない時に戦争をするものと解釈する」（以下、へ）内は「実録」と発言

もの海」を読み上げるのです。

佐藤 天皇の悲痛な思いと焦燥が感じられますね。

山内 それに対して、満座が静まり返る中、永野は「枢密院議長と同じ考えだ」と言い、前にも自分の考えは説明したから改めて発言しなかった、というふざけた答えを返す。杉山も続いて、軍令部総長の発言と全然同じである、とだけ答える。

佐藤 エリート官僚の常套的な回答ですね。

エリート軍人の狭い合理性

山内 そう、まさに杉山は陸軍官僚としてはエリート中のエリートなんです。陸軍大臣、教育總監、参謀総長と陸軍の三長官ポストをすべて歴任したのは、大正期の上原勇作と杉山だけ。しかし、杉山は下からは「ボケ元」「グズ元」と呼ばれていました。

佐藤 「便所の扉」というあだ名もありましたね。西劇の酒場の扉みたいに、押せばどちらにも開く、と。これも官僚組織で出世するタイプの典型で、できるだけ自分の態度を鮮明にせず、周りのパワーバランスを観察し、常に強い側に身を置くわけです。

山内 陸軍兵舎の便所の扉は内外どちらにも開いた

する。これに対し及川古志郎海相が、戦争準備と外交の間に軽重はなく、枢密院議長の認識と同じく、できる限り外交交渉を行うことが大事だと答えるのですが、ここでもう「外交が駄目なら戦争だ」という論理がなしくずしに国策要領の根幹に組み込まれてしまっている。

佐藤 クラウゼヴィッツの『戦争論』の論理ですね。彼は「戦争は他の手段をもつてする政治の継続である」という有名なテーゼを立てるのですが、実はこの論理だと、外交から断絶なしに戦争へ移行することが可能になってしまふ。仮に外交が主、戦争が従としても、開戦を食い止めることはできなかったでしょう。

山内 その通りです。ただ、ここで問題にしたいのは天皇の思いに対する軍部の態度です。この議論の間、陸軍の杉山元参謀総長も、海軍の永野修身軍令部総長もおそらく言質を取られまいと沈黙を続けているんです。これも『実録』を引用しましょう。会議のまさに終了せんとする時、天皇より御発言あり。天皇は、事重大につき、両統帥部長に質問すると述べられ、先刻枢密院議長が懇々と述べたことに対して両統帥部長は一言も答弁なかりしが如何、極めて重大な事項にもかかわらず、統帥部長より意思の表示がないことを遺憾に思うと仰せられる。そこで、昭和天皇は懐中から紙片を取り出して、「よ

うです（笑）。自分の戦略や国家観をふりかざす石原莞爾のようなタイプは出世しないんですね。

杉山の天皇に対する態度がよくわかるのは、九月六日の御前会議の前日の有名なやりとりです。この日、天皇が杉山参謀総長を呼んで、もし開戦になった場合、どのくらいで南方作戦を完遂できる見込みか、と尋ねる。すると、杉山の回答は、「陸海軍において研究の結果、南方作戦は約五箇月にて終了の見込みである」というものでした。これに対して、天皇は納得せず、「従来杉山の発言はしばしば反対の結果を招来した」と厳しい言葉を投げるのです。支那事変の勃発当時、陸軍大臣だった杉山は、支那事変は二カ月で片付くと言ったが、四年たつ

たいまでも終わっていないではないか、と。それでも杉山の返事は、「支那は奥地が広うございまして、予定通り作戦がいかなかったのであります」という人食ったものでした。これに対して、昭和天皇は「支那の奥地が広いと言ふのなら、太平洋はなお広いではないか。いかなる成算があつて五カ月と言ふのか」と〈強き御言葉を以て参謀総長を御叱責になつた。これは凄惨な場面ですよ。ここまで言われて、翌日の会議では平然とだんまりを決め込んでいる。こうした陸軍の姿勢が、日本の政治、統治の基本骨格を崩壊させていった。

佐藤 その一方で、私は、この杉山に代表される軍人たちは、ある意味で、非常に「合理的」な精神の持ち主でもあると思うのです。たとえば日本の国力を考えた場合、アメリカと戦争すれば、優勢を保てるのはせいぜい三〜五カ月だろうという計算は、その後の戦局から見ても、極めて正しかった。

山内 日本が負けるという意味ではね。

佐藤 その通りです。三〜五カ月しか攻勢が続かないという読みは正確ですが、彼らは「勝てる」という想定しかできなかった。「負ける」と言ったら自分の地位、軍隊の存在価値が否定されるという前提でしか思考できなかったからです。その「合理性」がきわめて狭いもので、陸軍の組織原理の内部だけで成立していた。

対米戦争は、日露戦争以降、はじめて日本が負ける可能性があった戦争でした。そもそも戦争というものは、勝つこともあれば負けることもある。どの程度の負けなら許容できるか、そのときの幕引きはどうするかを想定しない軍隊、政治のあり方こそ異常でした。もし近代日本がどこかで敗北を経験していたら、劣勢のなかでの和平がシミュレーションできていたかもしれません。

山内 実は昭和天皇は、開戦前に、佐藤さん御指摘の戦争終結の問題に心を砕いているんですね。

陥落させたあたりを自処として和平にもつていく、あるいは米英を分け、イギリスとは継続しつつ、アメリカとは関係調整に入るといった外交戦略もありえた。

山内 その意味で重要な分岐点となりえたのは、一九四一年十一月に出されたコーデル・ハル米國務長官から出された十項目の措置、いわゆる「ハル・ノート」への対応ですね。この十項目は、日本の支那及び仏印からの全面撤兵や蔣介石政権の認定（汪兆銘政権の否認）など、たしかに日本に不利な内容でしたが、たとえば原則撤退に同意しつつも、邦人居留地の保護などを理由に、実質的な撤退については時間をかけて徐々に行うというオプションもあったはずですよ。あるいは従来の条約によって日本が得ている権益との調整も必要ですから、いきなりすべての権利を失うわけではない。北京議定書や国民党と結んでいた梅津・何応欽協定、土肥原・秦徳純協定など個別の協定の廃棄や見直しをしながら交渉していけば、いきなり対米戦争などという愚かな選択は避けられた可能性もあるでしょうね。

軍部と外務省の『共謀』

佐藤 その意味で、開戦までの流れで気になるのは、

一九四一年十一月五日の御前会議で、原枢密院議長が「日本が参戦した場合、白色人種国家である独英米間の和平により、黄色人種国家である日本が孤立しないよう政府の善処を切望する」旨の発言をしています。これは明らかに天皇の意思を代弁したものでしょう。

さらに同年十月十三日には、木戸幸一内大臣を呼んで、もつとはつきりと、「対米英戦を決意の場合、ドイツの単独講和を封じ、日米戦に協力せしめるよう外交交渉の必要があること、さらに戦争終結の手段を最初から十分に考究し置く必要がある、そのためにはローマ法王庁との使臣の交換など、親善関係を樹立する必要がある旨を述べられ」ています。

佐藤 問題は、その具体的な方法を考えるべきは誰の役目かということですね。

山内 そう、職業軍人や政治家、外交官こそが知恵を振り絞るべき問題を、天皇が悩み、考え、訴えている状況はまさに悲劇的です。

佐藤 もし軍部が敗北の可能性を念頭においていれば、南方作戦以後のあり方も様々に考えられたはずですよ。たとえば、そもそも真珠湾などは攻撃せず、東南アジアのイギリス、オランダだけを相手に作戦を展開することもありえたし、対米英戦争となっても、シンガポールを

軍部と外務省との関係ですね。長年、外務省外交史料館にも在籍した佐藤元英中央大学教授の日米開戦の研究に面白いヒントがあるのですが、彼の分析によれば、もし真珠湾攻撃の前に、「対米通牒覚書」（最後通牒）が米國政府に届けられていたとしても、アメリカからは奇襲攻撃であり、ハーグ条約違反だとアピールされる可能性は十分あった。なぜならこの最後通牒には、明示的な形で開戦の意思が示されていないからです。しかも開戦の詔勅には、それまでの戦争では必ず入っていた「国際法を遵守し」という文言が入っていないのです。

こうしてみると、開戦をめぐる外務省と軍部は一種の共謀関係にあったのではないかと。当時の外務大臣、東郷茂徳は、軍の活動を極力やりやすくすることを考えて、できるかぎり曖昧な文章をつくり、アメリカへの通告文書も、できるかぎり分割して、わざわざ遅く送っていたと見ることもできる。国際法に言及していないのも、ルール違反とされる奇襲攻撃になることを意識していたからではないでしょうか。

山内 東郷が得しているのは、終戦時に和平派として活躍したというイメージがあるからですね。「日本のいちばん長い日」などで、東郷が陸軍の横暴を抑えてポツダム宣言受諾にこぎつけていく姿が描かれたことも大きい。

佐藤 ポツダム宣言受諾をめぐる東郷の仕事で一番大きいのは、連合国の回答をあえて意識したことではないでしょうか。ポツダム宣言に対して、日本側は、天皇統治の大権を変更しないという条件で受け入れる、と返します。それに対して、アメリカのバーンズ国務大臣による、いわゆる「バーンズ回答」には、「天皇及び日本国政府の国家統治の権限は連合軍最高司令官に「subject to」と記されていました。」

山内 この「subject to」を外務省は、「制限におかれる」と訳したわけですね。しかし、これは意識としても無理があるでしょう。

佐藤 普通に訳せば、「隷属する」「支配される」でしょう。軍部も英英辞典をひいて「違うじゃないか」と反対したけれど、東郷をはじめとする外務省は「英語が出来るものがあるか」と頑張った。結局、このアクロバティックな意識が、日本を終戦へと導いたのですから、東郷の功績大です（笑）。このように、外務省という組織には単語ひとつで歴史を変える、現実を作り変える力があることも覚えておくべきでしょう。これは戦後も同様で、そもそもUnited Nationsを「国際連合」と訳したのは、もつと乱暴な「意訳」です。これは文字通り「連合国」であって、第二次世界大戦の勝者を指す言

かは結局分からない。「一度へこたれたら、もう日本はおしまいだ」といった精神論なんです。非常に無責任な話です。これが政府と陸軍の最高首脳だった男の言うことだから困るのです。一般的に言えば、陸軍大学の競争倍率はいまの東大法学部や旧外交官試験などは問題にならないほど高い。しかし、いくら秀才でも石原あたりは東条上等兵と揶揄されるんですね。もつとも既得権益と軍人俸給や年金などの優遇を確保するといった官僚的資質において東条は才能がある。しかし、軍人としては平時なら連隊長（大佐）、よくて旅団長（少将）どまりでしょう。いまの日本の自衛隊ではトップに行くことはありえない凡将です。

この東条の樂觀はどこから来ているのか。彼の上奏をみていくと、頼みの綱はソ連なんです。東条は米英がソ連を「反目的に抱き込」もうとしている、ソ連の方から中立条約廃棄を通告される危険もある、としながらも、米英はソ連の抱き込みに今日まで成功していない、開戦したらすぐソ連が日本に宣戦するのではないかという意見もあったが、そうはならなかった、日本は外交的な成功を得ている、と述べているのです。

いま考える以上に、当時の日本の指導者たちには、まだソ連とは戦っていない、中立は保たれているという希

葉にほかなりません。

山内 まさに「外務省文学」のマジックですね。

指導者たちの樂觀的なソ連観

山内 真珠湾攻撃、マレー作戦と華々しく開戦した太平洋戦争ですが、日本側の大戦略の不在、国力の圧倒的な差などが重なり、戦局は悪化の一途をたどります。そして一九四五年になると、もはや敗戦必至となる。

私が『昭和天皇実録』を読む中で注目したのは、一九四五年二月、天皇が歴代首相を呼んで所感を尋ねていることでした。ここでやはり首相の器ではないと感じるものが、東条英機ですね。この期に及んでも「我は正義の上立つ戦なり」などとふざけたことを言っている。

佐藤 正しい戦でも負けることはいくらでもありませんからね。

山内 さらに続けて「皇国不滅の精神に立つならば、悲観に及ばず。その後起り来る欧州の情勢の変転を注視し、平和を掴み得べし」と。要するに、独ソ戦が落ち着いたら、ソ連と英米の間に矛盾が起きるだろう、情勢の変化を注視しながら、講和の機会をうかがうべきだというのですが、一体、それまでどうやってこの国を保つの

望の観測があった。それを最も象徴するのが、この年の六月、広田弘毅がソ連大使のマリクと始めた終戦工作でしょう。一九四五年四月から首相になり、終戦を主導した鈴木貫太郎でさえ、「スターリンは西郷隆盛に似ている」などと発言したりしていますね。

佐藤 鈴木はスターリン観には、スターリンと直接会った松岡洋右の影響を感じますね。スターリンは松岡をわざわざ駅のプラットフォームまで見送り、抱擁までして、文字通り「抱き込み」に成功しました。また、ロシア通の軍人は、スターリン主義の本質は共産主義ではなく、ファッショ国家だと分析していました。資本主義の米英よりも、むしろ日本のほうに近いという認識があった。

山内 ソ連の本質はファッショ国家＝全体主義だという視点は、かなりの程度当たっていますね。

興味深いことに、このときの東条の発言のなかに、いま米英ソの三巨頭がクリミアで会談を行っているという情報も入っていました。まさにそのヤルタ会談で、ソ連の対日参戦の密約が交わされていたというのに、このズレは致命的だった。しかもこの密約については、在スウェーデン公使館の駐在武官だった小野寺信少将が情報を入手、参謀本部に送っていたのに無視されてしまった。

佐藤 岡部伸氏の『消えたヤルタ密約緊急電』による

と、小野寺の情報は参謀本部第二部(情報)に届いたのですが、第一部(作戦課)にいた瀬島龍三が握りつぶしたといえます。また、この小野寺は皇道派でしたから、当時の陸軍主流は彼の報告を放置したのでしょうか。

阿南陸相の切腹がもたらしたもの

山内 では、いよいよ終戦を決めた八月十四日をみていきましょう。この日から翌十五日にかけて、まさに一國の運命を決する壮絶なドラマが展開されました。

この日の午前十一時、御前会議が開かれます。梅津美治郎参謀総長、阿南惟幾陸軍大臣、豊田副武軍令部総長による抗戦の主張を聴いた後、昭和天皇は戦争終結の決意に変わりはないこと、(戦争を継続すれば国体も国家の将来もなくなることを、これに反し、即時停戦すれば将来発展の根基は残ること)を述べ、(武装解除・戦争犯罪人の差し出しは堪え難きも、国家と国民の幸福のためには、三國干渉時の明治天皇の御決断に倣い、決心した)ことを語ったのです。天皇の切実な思いが伝わる言葉ですが、『実録』でこの部分を読んだとき、私の胸には、これを天皇に言わせた軍部に対する怒りが改めてむらむ

強要、拒否した森越師団長と白石通教中佐を殺害するのは、そして玉音放送を阻止するため、近衛師団の歩兵連隊を動かし、宮城の占拠に至る。

そうした事件のさなか、十五日の朝五時半、阿南陸軍大臣が陸相官邸で剖腹自殺を遂げます。その陸相自決の報が広がるにつれ、青年将校たちの反乱も収束していく。最後の最後で、阿南陸相は自らの死をもって、陸軍のどうしようもない憑き物を落とし、カタルシスをもたらしたことになる。もちろん全責任を負ったともいえるでしょう。午前十一時にクーデターを首謀した椎崎中佐、畑中少佐が二重橋近くの芝生の上で自刃。そして正午、日本全国のラジオから玉音放送が流されるというフィクション以上のドラマなのです。しかし陸海軍の終焉は、国民不在の壮大なドラマだった。この特性こそ戦後日本の新たな出発になるのです。

佐藤 現在の目から見れば、反乱将校たちの行動は不合理ではありませぬ。しかし、歴史の検証という意味で、彼らの論理を追っていくと、そこにはひとつの合理性があつたと思うのです。

そもそもポツダム宣言を受け入れて、本当に国体が護持できるのか。実際、占領軍がやってきて、日本は国家

らとこみあげてきました。自分たちの不始末で戦争を始めておきながら、その収束は天皇に任せる。戦争に負けた事実を自分たちが認めたくないから、天皇に終戦を語らせたわけです。これは卑怯(あやま)というものでしょう。人間のやることだから、大きな過ち(あやま)は歴史どこにでもあるかもしれない。これは歴史のリアリズムともいうべきものです。しかし、最後の最後に自分たちで敗戦の責任をとらなかつたあたりに、日本陸軍という組織の無残さを感ぜずにはいられません。

そして、このあと、十四日の夜から十五日の未明にかけて、宮城事件が起きる。つまり、徹底抗戦を唱える陸軍の一部青年将校がクーデターを図るのです。

実は八月十日の段階で、阿南陸相は荒尾興功軍事課長、義弟の竹下正彦中佐などの将校たちにクーデター計画を知らされ、賛同を迫られていました。十四日の御前会議後、竹下中佐は、阿南大臣に陸相を辞任して内閣を総辞職させるか剖腹するかの択一を迫りますが、阿南は「承諾必謹」、つまり天皇の言葉は絶対だとしてこれを退ける。それでも一部の将校の暴走は止まりません。

十五日未明、井田正孝中佐、椎崎二郎中佐、畑中健二少佐らは近衛師団司令部に赴き、クーデターへの参加を

としての独立を失うことになつたわけです。すると、焦土になるまで徹底抗戦を行い、アメリカ軍に消耗戦を戦わせることで、彼らのコスト意識に働きかけるという選択はありえたと。事実、陸軍には本土であと二年は戦える余力もあつた。

さらに中国に駐留する陸軍の存在もありました。これは南京の汪兆銘政権との同盟条約に基づく合法的な駐留であり、汪兆銘政権が実効支配している領域は蒋介石たちよりも圧倒的に広がつたのです。それを考えると、中国の兵力をすぐに放棄せずに、連合軍にプレッシャーを与えることも可能だった。

山内 いまの佐藤さんの分析は、歴史上の理論的選択としては非常に興味深いのですが、私は現実的には成り立たないシナリオだつたと思います。やはり総力戦であるこの戦争で、もはや日本にも陸軍にも、それだけの作戦を遂行する能力は残っていませんでした。もつといえ、仮にクーデターが成功したとしても、それを指揮する政治的な柱がもはや存在しなかつたのではないか。

佐藤 合理性の追求という意味では、もつとラディカルだったのは陸軍中野学校ですね。彼らがつくつた資料集には、参謀本部による欧州情勢分析が収められている

のですが、それによると、一九四二年にはドイツとイタリアは敗北必至という結論が出る。それを受けて中野学校では、日本の敗戦・占領も確実として、一九四六年に九州上陸、一九四七年に九十九里浜上陸、日本は完全に占領下に置かれるといった予測まで立てているんです。そうなったとき、日本軍はどうするか。いかに地下政府を組織して抗戦ネットワークを作るか、傀儡の日本政府に送り込む要員はどうするか、外からの工作のためにどうやって海外に諜報要員を送り込むか、皇室をどう隠すかといった具体的な計画を立てていた。

山内 これはこれで、インテリジェンスには必要な考え方ですね。必要な議論はきちんとしている。

佐藤 中野学校が尉官と下士官までしか養成できなかったことは悔やまれますね。佐官級まで育てる時間的な余裕があれば、陸軍全体に影響力を及ぼした可能性があります。

ただ、ここで重要なのは、合理的であることが常に正しく、より有効だとは限らないということです。

その好例が、阿南陸相の自決だった。あれが服毒自殺やピストル自殺だったら、山内さんが指摘されたような影響力は持たなかったと思います。切腹だから、「おれ

の腹は真つ白だ。だから腸を引き出して叩きつける」というメッセージを持ち得た。

山内 まさに、「赤心を推して人の腹中に置く」、すなわち他人を疑わないまごころを披瀝するわけです。阿南個人はいかにも武士道を体現した武人だったから、陸軍全体にカタルシスが起きたともいえます。東条や杉山では阿南の演じた役割は果たせなかったでしょう。阿南のように幼年学校長もして佐官級の教え子にも慕われ、政治性のない軍人が敗戦の重要時局で登場したあたりに、歴史の偶然や人事の妙というのはあるのです。

佐藤 そうなんです。それは当時の軍人が共有していた死者との連帯感とも響き合います。彼らにとって「戦死したら靖国神社でまた会える」という信念はリアルなものだった。その心性に、阿南陸相の自決は訴えかけた。反乱将校の合理性を切断了のが、阿南自決の非合理的なリアリズムだったというのが、私の解釈です。

蛍の夜の昭和天皇

山内 最後に考えてみたいのは、終戦の決断をした昭和天皇の心のうちです。昭和天皇という存在は、実は三

つの顔を持っていた。ひとつは統帥権を持った元帥として、軍の最高責任者でした。それと同時に、統治権の総攬者として、政府、あるいは社会や国民を運営・指導していく立場でもあった。さらには伝統的な祭祀の長という側面も持つている。こうした矛盾する要素に引き裂かれそうになりながら、昭和天皇のベースには一貫して物事を客観的、冷静にみる知性があったと思うのです。有名なエピソードですが、昭和天皇の書齋には三つの胸像が置かれていたそうです。進化論を提唱した博物学者のダーウィン、アメリカの統合を戦争によっても保ったリオンカーン米大統領、欧州を征服したナポレオン。この三者の胸像の意味を考えると非常に興味深い。

佐藤 それは非常によくわかります。私の言葉でいえば、昭和天皇はハイブリッドな思考の出来る人だったと思うのです。統帥権と立憲君主制、あるいは近代と伝統を巧みに切り替えながら、両立させていくことができた。

山内 つまり、どうしても性格の異なる三つの次元で存在感を発揮しなければならぬこともある。天皇がハイブリッドで混濁している役割を上手に切り替えていた、ということですね。

佐藤 はい。実はこのハイブリッドというのは、日本

人の特性でもあると思うのです。陸軍にしても、いったん終戦と決まったら、それまでの徹底抗戦を切り替えて、実に合理的に撤退を行う。本当は戦争を終わらせるということはとても難しい作業で、ドイツのナチス政権は最後まで止まらなかったし、イタリアもクーデターに至った。合理的に敗北できたのは日本だけなんです。

山内 その切り替えの要に、天皇による聖断があったという点が、この国の歴史の面白さでしょう。

私が『実録』を読んでいく中で、とても印象的に残ったのは、一九四五年六月二十日の記述なんです。

〈夜、皇后と共に観瀑亭・丸池付近にお出ましになり、一時間にわたり蛍を御覧になる〉

たったこれだけなのですが、私はなんとも言えず深い感慨に打たれました。そして、この二日後、天皇は最高戦争指導会議懇談会に出席し、〈戦争の終結についても速やかに具体的研究を遂げ、その実現に努力することを望む〉と述べるわけです。戦況が悪化する中、静かに明滅しながら飛来する蛍の群れを一時間もご覧になりながら、天皇の胸に何が去来したのか。誰でもあえて推測するように、この国と国民への思い、戦争を終わらせる静かな決意が感じられるのです。